

論文審査結果の要旨

氏名 佐久川 政吉

〔研究背景と目的〕高齢者は、衰退現象として老化や病気に伴う身体機能が低下する一方で、成熟現象として経験が蓄積され生きる知恵として発達する精神機能がある。近年、成熟現象を捉える概念として、ストレングスが注目されている。ストレングスがケアに導入されたのは1970年代であるが、先行研究ではストレングスの定義及び構成要素、その重要性を示唆するような事例研究はあるが、実証的に構造化を試みた研究は見当たらず、理論構築が求められている。

ストレングスを実証的に明らかにしていくためには、高齢者が記憶の中から想起しやすく、顕在化しやすい内容を設定する必要がある。Saleebey(1996)は、文化的・個人的ストーリーがストレングスの宝庫であり、その意味の創出の鍵は、当事者の語りの中にあるため、その語りに基づく実証的な研究の必要性を強調しており、星野(2001)は、高齢者では過去のライフイベントより現時点で生じるライフイベントをどのように把握し、どのように意味づけているかが重要だと指摘している。そこで本研究では、「老年期のライフイベント」に着目し、その適応の記憶から語られることが期待されるストレングスの検討を試みた。ストレングスの構成要素については、Rappら(2006)は個人要素として能力、願望、自信、環境要素として社会関係、資源、機会をあげている。本研究では個人要素としての「能力」に注目した。能力について、岩本(2013)はいろいろな困難を乗り越え、生き抜いてきた体験により、獲得し発達させることができるといわれる。そこで、能力は精神機能を活かした行動として表出されやすいと考えられる。しかし、願望と自信という個人要素の場合は、個人の内面に特化し行動として表出されにくく、環境要素は個人ではなく環境が主体となりやすい要素であると考えられる。したがって、高齢者を主体として行動までの表出が期待できる能力に着目したのである。また、本研究の対象高齢者は、成人期に発症し、身体機能は寛解と増悪を繰り返しながら低下していくが、精神機能は維持されている関節リウマチ(RAと略)をも

つ高齢者を選定した。RA 高齢者は疾患特性から長い闘病生活を通して精神機能を強化し、特に RA 女性高齢者は自らの闘病体験を語ることができ、老年期の英知で意味を見出し、それがストレングスになっていることが考えられる。

以上のことから、本研究では、RA 女性高齢者の「老年期のライフイベント」への適応にみられた「能力」の構造化からストレングスを明らかにすることとした。

【対象及び方法】 研究協力者は、在宅で生活し RA と診断された 65 歳以上の女性高齢者とした。まず A 県内の地域包括支援センター及び訪問看護ステーションに調査協力を依頼し、RA を発症後 10 年以上で手術経験があり、面接調査が可能な者を選定・紹介し同意の得られた 14 人であった。調査は自宅での 2～4 回の訪問面接調査によって、1 回 30～60 分で行った。統一的なインタビュー・ガイドにそって、基本属性、生活史、病歴、ライフイベント及びその対処法などについて聞き取りを行った。調査内容は本人の了解を得て IC レコーダーに録音し逐語録を作成した。分析は逐語録を精読し、その中から「老年期のライフイベント」に関連すると思われる文章の塊を抜き出しエピソードを作った。次に、エピソードから文脈上読み取れる了解可能な最小単位の文章で、ストレングスと解釈できる内容をキーセンテンス（“ ”）とした。類似したキーセンテンスを集め、サブカテゴリー（< >）を見出した。さらに、サブカテゴリー化したものを類似内容ごとに集め、カテゴリー（《 》）、コアカテゴリー（【 】）を生成していった。真実性・妥当性の確保のため、学位（博士）を有し RA 高齢者への看護実践経験のある研究者 2 人と合意を得るまで検討し、恣意的な解釈がないかを確認しながら分析を進めた。

【結果及び考察】 老年期のライフイベントとしては、孫の誕生（3 人）、夫との死別（2 人）、ボランティア活動、RA 仲間との模合（頼母子講）、一人暮らし、海外旅行、リウマチ闘病体験の発表、リハビリの利用、新薬の利用、緊急手術、通所サービスの利用があげられた。これらのライフイベントへの適応から見出された「能力」は、97 のキーセンテンス、26 のサブカテゴリー、13 のカテゴリーが抽出された。さらに、13 のカテゴリー

は3つのコアカテゴリーにまとめられた。つまり、病気の意味の探求、受容、相互依存である。RA 高齢者は、精神機能を活かしRAを《長患いの価値》として意味づけるという【病気の意味の探求】をしていた。この病気の意味の探究を礎に、自己に向き合う《自己覚知》と《しなやかさ》を發揮し、また、個人にとどまらず関わりのある環境（他者、サービス、病気）への《謝恩》ができる【受容】へと能力を向上させていた。さらに、その集大成として、《根気》《跳ね返す力》《自己決定力》を踏まえた上で、環境に対して《言語化による自己表現》《臨機応変にセルフケア》《居心地よさの創出》として向き合いつつ、個人の力で限界の時は、環境の力を取り込むという《社会資源の獲得》をしていた。一方で、環境への働きかけとして、《世話上手》であり、《次世代の育成》まで担う利他的な能力を發揮していた。

RA 高齢者は、老年期に至るまでに脈々と培ってきた精神機能を生かし、RA という病気を探求する中で意味づけ、受容し、個人と環境との相互依存の形を生成できる能力を身につけ向上させているという構造が導かれた。つまり、RA 高齢者のストレンクスとしての「能力」は、病気の意味の探求、受容、相互依存の3層構造が見出され、しかも、病気の意味の探求から受容へ、受容から相互依存へと能力の向上がみられることが確認された。他の慢性疾患患者やRA 若年者でも、病気の意味の探求や受容のプロセスは示唆されているが、RA 高齢者の「能力」は相互依存をも含む3層構造でその向上のプロセスがみられることは、先駆的な見解だといえる。

[結語]「老年期のライフイベント」への適応から導かれたRA 高齢者の「能力」とは、病気の意味の探求、受容、相互依存という3層構造をなし、しかも、病気の意味の探求から受容へ、受容から相互依存へと能力の向上がみられることが確認された。このことは先駆的な実証的な結果として評価できるものである。しかも、ストレンクスの他の構成要素の解明にも活かされ、さらに超高齢社会を迎え、高齢者特に慢性疾患や要介護高齢者の能力の発見や精神機能の成熟現象に着目した高齢者ケアへの応用可能性があるものと考えられる。

したがって、博士（保健学）の学位の授与に値するものと認められる。

【論文審査委員】

(委員長)	教授	宮城	重二
	教授	香川	靖雄
	教授	小林	正子
	教授	遠藤	伸子
	教授	橋本	紀子